昆虫類　＜チョウ目　タテハチョウ科＞　　愛知県：絶滅　　（国：絶滅危惧ⅠA類）
INSECTA　＜LEPIDOPTERA　NYMPHALIDAE＞　　AICHI：EX　　（JAPAN：CR）

オオウラギンヒョウモン　*Fabriciana nerippe* (C. et R. Felder)

【選定理由】

過去に生息していた記録はあるが、現存を確認できない。国内で最も減少したチョウの一つであり近隣の三重県、岐阜県、静岡県などでは、既に絶滅と評価され現在にいたっている（間野ほか, 2009）。

【形　態】

本種はウラギンヒョウモンと混同、あるいは誤って同定されることが多い。和名オオウラギンヒョウモンは“大型のウラギンヒョウモン”である。他のヒョウモン類と比べて一般に大型、特に♀は著しく大型になる。♀の前翅端近くに白斑を現すが、この白斑は♂には出現しない。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市近郊（1937）、南知多市（1956）の二か所の報告があるものの採集年月日、具体的な採集地などのデータが明記されていないし写真も標本も現存していない（阿江ほか, 2002）。また、レッドリストあいち 2015 策定時の調査で新たに見つかった文献によると、本種は名古屋市北区の矢田川 JR 中央線鉄橋の左岸堤防で確認されている（加藤, 1942）。

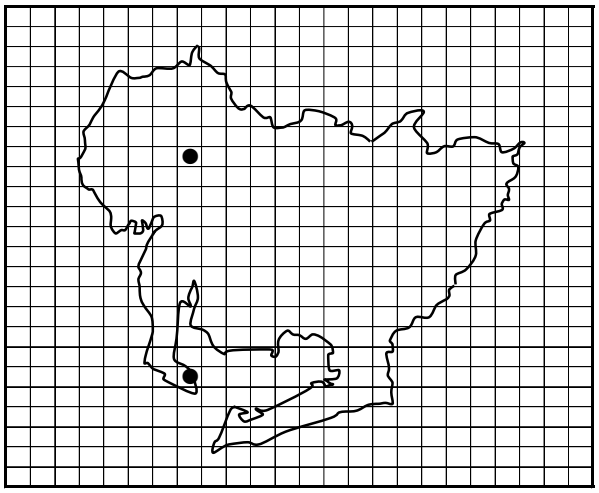
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布していた。現在では、九州と山口県の一部を除いたほとんどの記録地で絶滅している。

【世界の分布】

日本、ロシアのウスリーやアムール地区、朝鮮半島、中国東北部、中国など。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

草刈り頻度の高い草丈の低い草原に生息、アザミ類やオカトラノオなど各種の花に訪れる。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

他県での現在の生息地は、規模の大きい草丈の低い草原、例えば自衛隊の演習地などである。

本県では、1939 年に名古屋市の矢田川 JR 鉄橋の左岸で一日に十数頭が確認されたが、翌年にはまったく確認されていない（加藤, 1942）。

減少の原因も本種の好む草原環境が開発や管理放棄で減少、孤立したことも一因と考えられているが、詳細は不明である。

【保全上の留意点】

本種の減少はスミレ類全般の減少とは考えにくい。

現時点では調査する機会もなく本種が激減しているので、生息地の特徴などを特定することは困難であり、また本種の生態に不明な点も多く、具体的な保全の提案は難しい。しかし、本種を含め草原性のチョウ類が全国的に減少していることから草原の保全は有効である。

【特記事項】

2009 年検討の折、本種の標本や確実な文献などがなかったことから評価対象外としていたが、本種の生息が確認できる文献（加藤, 1942）が、今回新たに発見された。

【引用文献】

加藤一三, 1942. 學林, No.117. 愛知県第一中学校.
阿江 茂ほか, 2002. オオウラギンヒョウモン. レッドデータブックあいち動物編 2002: 195. 愛知県自然環境課, 愛知県.
間野隆裕ほか, 2009. 日本産蝶類の衰亡と保護第 6 集: 170-187. 日本鱗翅学会, 東京.

【関連文献】

白水 隆, 2006. オオウラギンヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑, p.219. 学習研究社, 東京.
日本チョウ類保全協会編, 2012. オオウラギンヒョウモン. フィールドガイド日本のチョウ, p.199. 誠文堂新光社, 東京.

（2015 年リスト付属資料を一部修正）